

「他人事と実感のあいだ」

第一回をお読みいただけたらどうか。

この第一回を読んだ友人からラインがきた。

「ほっこりした」

「身につまされる」

など、なんとなく「初めて聞く話」の感がある言い回しに

「本文中の『同い年の友人』とは、あなたのことです」

と返したら

なんていうんですか？

あの白くて丸い顔のスタンプ。

あれの「ササーッ、真っ青」みたいな表情のやつが送られてきて

「忘れております」と。

いやいやいや、地味に盛り上がったじゃん。

シャンプーしたかどうか思い出せず、時には顔を洗ったかもわかんなくなっ
てこわいという私の話に、

そんなことはすでに経験済みだと。

めずらしいことではないんだと。

経験者の余裕を漂わせていたではないか。

そんな彼女は、買い物メモを音声で入れているとか。

最近同じ内容が2つ入っていてこわい、とも。

私もボイスメモに挑戦したことがあるが、あれって再生すると、なんか呪文。

だから使ったのは一度きりである。

さらに、こここのところ俄然ピントがあわなくなってきた。

他者との適切な距離は腕一本分というが、

私はカップラーメンとの距離に腕一本分が必要である。

「作り方」をみるための距離だ。

はじめてこのことに気づいたとき、私は左腕をめいっばいのばしたまま

その先にあるカップラーメンをみつめながら「へえっ」と半ば他人事のような声をあげ、
そんな自分の姿が可笑しくてたまらず、低い声で笑った。ひとりで。

身体機能の衰えに気づくと、なんだか笑いがこみあげてくる。

もう子どもの頃のように全速力で走ったり、若い頃のようにピンヒールで歩くのは無理。

できないが増えるたびに「へっ」という感慨を抱く。

「他人事」と「実感」のあいだに「笑い」がある。

歳をとるのは悪くない。

知らなかった感覚に出会えるから。

